

## 周産期の女性の不安と抑うつに対する心理的支援に関する研究

著者	佐藤 喜根子
号	12
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第115 号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59139">http://hdl.handle.net/10097/59139</a>

さ　　とう　　き　ね　こ  
佐　藤　喜根子

学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	教博 第 115 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 総合教育科学専攻
学 位 論 文 題 目	周産期の女性の不安と抑うつに対する心理的支援に 関する研究
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 細 川 徹 教 授 川 住 隆 一 教 授 上 埜 高 志 准教授 田 中 真 理

## 〈論 文 内 容 の 要 旨〉

本論文は、周産期（特に妊娠末期から産褥 3 ヶ月目）の女性の心理に焦点をあて、不安、抑うつや愛着障害の有無と、時期による変化等の実態を調べ、それらに關係する諸要因を明らかにするとともに、従来の妊婦管理に新たな心理的支援の仕組みを取り入れ、それが産褥期の抑うつと児への愛着障害の予防や軽減に対して効果的であるか否かを検証することを目的としたものである。

論文は 9 章からなり、序章では論文全体を概観し、周産期の女性の心理に関する研究の流れを述べた。第 1 章から 3 章では、研究の背景についてまとめた。第 1 章では、周産期の女性の心理的特徴について、この時期におけるホルモン動態と特殊な生理的因子を含めて、妊娠期、分娩期および産褥期別に整理した。第 2 章では、最近の低出生体重児や重度の障害児の増加、あるいは実母による児童虐待の増加などの周産期の女性を巡る困難な状況を述べ、彼女らに対する心理的支援の必要性和緊急性を指摘した。第 3 章では、産後うつ病への予防的介入に関する国内外の研究の歴史と動向、および助産師が行う心理的支援の意義について述べた。その中で、予防的介入の対象はハイリスク妊婦が多く、具体的な支援方法は集団指導に偏っていたこと、また、介入の

時期や支援者の職種も多様であること、そして、予防的介入研究はまだその緒に就いたばかりであることを指摘した。

第4章から第6章は、周産期の女性（妊娠末期から産褥3ヶ月目）の不安、抑うつと愛着障害の実態に関する一連の調査からなる。第4章では、妊娠末期から産褥1ヶ月目までの特性不安と状態不安について調べ、特性不安得点の高い者は状態不安得点も高く、妊娠末期と産褥期の得点間には有意な正の相関があることを述べた。また、対象者のうちマタニティ・ブルーズ症状を呈した者は64%で、そのような症状がある経産婦は初産婦よりも不安が強いことを明らかにした。第5章では、産褥5日目から3ヶ月目までの抑うつ状態をEPDS（エジンバラ産後うつ病調査票）で評価し、産褥3ヶ月目の時点でEPDS得点が9点以上である産後うつ病のハイリスク群は全体の16%にのぼることを明らかにした。これは諸外国における割合よりも高く、わが国において周産期の女性に対する積極的な心理的支援が急務であることを示した。さらに、産褥1ヶ月目と3ヶ月目で新たにEPDS得点が9点以上になる褥婦が存在すること、EPDS得点は初産婦が経産婦より高く、夫の協力が得られず経済的に苦しいと感じる者ほどEPDS得点が高くなることを明らかにした。第6章では、周産期の女性の心理状態に影響する諸要因について、EPDS得点を目的変数とするロジスティック回帰分析を行った。その結果、経済状態が貧しいと感じること、育児不安が強いこと、および妊娠の計画性がないことなどがEPDS得点を上昇させる要因であることがわかった。ただし、各要因の寄与は時期（産褥5日目、1ヶ月目、3ヶ月目）によって微妙に異なることもわかった。産後うつ病は単に褥婦自身の問題にとどまらず、育児態度や初期の親子関係にも重大な影響を及ぼすだけに、積極的な予防的介入の必要性が改めて浮き彫りとなった。

以上の研究を踏まえて、第7章では、無作為割り付けによる患者対照研究デザインを用いて、特定の助産師が妊娠初期から産褥期まで継続した心理的支援（カウンセリング、妊娠期と産褥期のグループセッション等）を行う妊婦からなる介入群と、従来通りの健診を行う妊婦からなる対照群を種々の心理指標を用いて縦断的に比較した。その結果、抑うつ状態に関しては、産後のEPDS得点は産褥3ヶ月目で介入群が対照群より有意に低値を示し、経産婦や低出生体重児の母親の場合もその傾向は変わらなかった。また愛着障害に関しては、産褥1ヶ月と3ヶ月目にBonding Questionnaire得点に有意な低値を示した。このことは、妊娠期からの継続した心理的支援が周産期の女性の心理的安定と児に対する愛着の促進につながっていることを示唆するものである。

最後に、第8章では、上記の研究結果をまとめるとともに、周産期の女性の不安、抑うつや愛着障害を改善・軽減する方法として助産師による妊娠期からの継続した心理的支援が有効であるという結論を基に、今後の課題について論じ、さらに、これからの周産期医療体制とそこにおける助産師の果たすべき役割を提言し、妊産褥婦に対する継続した心理的支援を新たに助産師教育に反映させていくことの意義について述べた。

## 〈論文審査の結果の要旨〉

諸外国における近年の研究では、10%を超える女性が産後1年以内にうつ病などの気分障害に罹患すると報告されている。このことは、母子関係はもとより、家族全体にも深刻な影響を与え、長期的には子どもの認知・情緒の発達に悪影響を及ぼすことが知られている。産後うつ病に対しては、症状が発現してからでなく、発症前の予防的介入が望まれているが、本論文は、まさにこの点に着目し、妊娠期から産後3ヶ月までの間に助産師が一貫した心理的支援を行うことによって、妊産褥婦の抑うつが低減されることを実証したものである。

本論文の独自性と学術的意義は次の3点である。

第1点は、メタ分析の結果から知られている産後うつ病の予測因子として重要な妊娠期の不安と抑うつを取り上げ、その実態を明らかにしたことである。これと同様の研究は少なくないが、妊娠期から産褥3ヶ月までの期間、多数の妊産婦の心理状態の推移を追った縦断的研究はきわめて稀であることは高く評価できる。加えて、他の予測因子である子育てのストレス、社会的支援、マタニティ・ブルーズ、結婚生活の満足度、社会経済的状态や計画性のない望まない妊娠などについても、多変量解析により、それぞれの時期における寄与の度合いが示されている点も評価できる。

第2点は、助産師による個別カウンセリングとグループ・ディスカッションを柱とする心理的介入研究を行い、その有用性を実証したことである。本論文では、妊婦を一定の基準の下に介入群（前述の心理的支援を行う）と対照群（従来の健診と母親学級への参加）に無作為に割り振り、介入の効果を先進的な研究デザインにより検証していることは特筆に値する。一方で、介入に用いた2つの心理的支援（個別カウンセリングとグループ・ディスカッション）の効果が分離できないという弱点もあるが、いずれの群に参加しても患者の不利益になることを避けるという倫理的配慮は不可欠で、通常の健診に対してカウンセリング、母親学級に対してグループ・ディスカッションを対置させざるを得ないという制約があることは理解できる。

第3点は、これまでの内外の研究では、うつ病のハイリスクがある妊産婦に対して心理的支援を含む予防的介入が行われてきたが、本論文では、すべての妊婦（ハイリスクも含む）を対象としたことで、方法の一般化がはかられていることである。ただし、そうした学術的意義とは別に、費用対効果の面から見れば、すべての妊婦にこれを適用することは現実的ではない。あえてそうした理由は、本論文が助産師教育（とくに卒後教育）における1つの職能モデルを提示する意図をもっているからである。助産師は単に出産を補助するだけの職業ではなく、女性の性にかかわ

る健康を生涯にわたってケアする専門職と位置づけられており、本論文では、助産師は生殖年齢にある女性の健康について有効なケア（身体面のみならず心理面も含めて）を行う役割を担うべきであることが総合考察の中で示唆されている。

本論文は、臨床研究のもつ方法論上の限界など残された課題も少なくないが、助産師による周産期の女性に対する長期間の一貫した心理的支援が抑うつ状態の低減に有効であることを緻密な研究計画により実証したもので、斯学の発展に寄与するところも大であり、また、その研究成果は今後の助産師教育に資するものとして大いに期待できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。